

コミュニケーション中心の授業の後の フランス語学習をどうするか？ —英語を主専攻言語とする学生のための 文法・読解中心の授業の試み—

平嶋 里珂
HIRASHIMA Rika
Université Kansai
rika3?kansai-u.ac.jp

1. 大学におけるフランス語学習・教育の可能性

最近の初級フランス語教材はコミュニケーション能力の養成を目的として、文法、語彙、スピーチアクト等を総合学習的に学ぶものが増えつつある。このような教材でフランス語学習を始めると、自己紹介、道順を尋ねる、家族について話す、食生活について話す、一日の時間の使い方を話す等、具体的なトピックに応じてフランス語を用いることが容易になる。しかし、フランス語学習を継続しようとする際、次のような問題点に遭遇する：

・同じ路線で授業が行いにくい

2年目以降の第二外国語学習の時間的制限から2年目を想定したコミュニケーション主体のフランス語総合教材は多くない。2年目に週2コマの授業が確保できないと運用練習に時間を使えず、運用練習に焦点をおくと学習内容が薄くなるというジレンマに陥る。

・学んだ知識の応用が難しい

コミュニケーション主体の教科書は概念・機能シラバスに基づいて語学要素を配置しているため、トピックに関係ある範囲内でしか文法事項を扱えないという制約があり、学んだ事項を別の場面や状況で応用しにくい。1年次では短いやり取り中心に運用練習を行うため、構文を確認しながら文章を読解することも少ない。限られた文法知識（コミュニケーション主体の入門～初級教材で学習する文法のレベルは仏検5級から4級に満たない程度である）で文章の読解作業を始めるのは、文法知識の面からも、ストラテジーの問題からもかなり負担がかかる。

このような状況で、初年次以降の第二外国語としてのフランス語教育は、どのような方向性をもって授業を行うべきだろうか？筆者の勤務校における外国語学習の状況をみると、フランス学（フランス文学、フランス文化等）専攻を除いては英語が外国語の主たるコミュニケーションツールである。一方で、政治、法律、コマーシャリズム等の分野では、英語に加えてフランス語も文献講読のツールとして使う可能性がある。つまり、基本のコミュニケーションは英語で行うことが圧倒的に多いが、フランス語で書かれたテキスト（専門に関わる文献、ネット上の文字情報など）を理解し活用するだけの文法知識と読解能力は必要とされる可能性があるということである。上記の状況を踏まえ、筆者は数年前から、大多数の学生の既習外国語であ

る英語の知識を活用して、フランス語の文法知識と読解能力を身に着けることを主眼とした授業を試みている。

2. 対象となる学習者と外国語学習の状況

筆者が読解中心の授業を行っているのは関西大学外国語学部である。この学部では主専攻言語は英語または中国語であり、フランス語はプラスワン言語と呼ばれる必修の第二外国語の一つである。フランス語を選択する学生はほぼ全員英語を専攻している。外国語学部の学生は2年次に全員主専攻言語を学ぶために外国に留学する。このため、フランス語を選んだ英語専攻の学習者は1年次で英語の運用能力を集中的に鍛え、フランス語については週2回コミュニケーション主体の教科書で学習する。2年次に9か月の海外留学を終えて帰国すると、3年次でプログラム科目という言語に関する専門科目と英語の上級スキル科目を中心に授業を受ける。フランス語のようなプラスワン言語には、口頭運用能力重視の授業と文法講読中心の授業が選択科目として準備されている¹。

3年次にフランス語を受講する学生は数名であり、大半の受講者はTOEFL500点以上の英語の運用能力を持っている。2年次にフランス語を学習していないため授業開始直後は1年次に学習したことを忘れていたが、1・2回復習すれば、自己紹介、一日にすること、食生活などのテーマで簡単なQA、ミニスピーチを行うことができ、同じ内容の聴解能力もある。これまでの英語学習・海外留学経験により外国語学習に対するReadinessは高く、積極的に授業活動に参加することができ、言語の仕組みを分析的に説明・理解することも得意である。

3. 英語を主専攻とする学生に対する文法・読解を中心とした授業のポイント

学習者と授業環境に関わる要因（初年次に使用した教科書の性質、1年間の学習プランク等）を考慮し、春学期の最初数回の授業で1年次の復習を行いながら、動詞、テーマ毎の語彙など文の要素を意識させていく。さらに、初級のコミュニケーションでは重視されない基本的文法事項（3種類の疑問文の作り方、名詞と限定詞の性数一致、名詞と形容詞の性数一致、形容詞の語順等）を補足説明し、文法問題を中心に簡単な読解練習を行う。

4月末から5月初旬には新出文法事項を学習できるようになる。授業を行う上で以下の基本方針を取っている。

a. 文法は明示的に記述、演繹的に学習

選択科目のフランス語は週1回しか授業がない。少ない授業時間で効率的に必要な事項を提示するためにも、ほとんどの学習要素事項は明示的に記述する。文法は形態的特徴、基本的意味、主な用法と例文の提示から練習問題に至る演繹的方法で学習する。

b. システムの要となる文法事項は十分に時間をかけて学習

新出文法事項として複数の動詞時制形を学習するが、4月末～7月に学習するのは複合過去形、半過去形、単純未来形のみであり量は多くない。これらの動詞時制形は直説法の他の時制形を学ぶベースになるので、形態的特徴と基本用法の理解と基本的運用練習には時間をかける。練習は機械的な活用練習に始まり、QA、書き換え、穴埋め式文章作成、読解等、多様な練習

¹ CF. 関西大学の他学部では、原則として第一外国語（大半は英語）・第二外国語ともに8単位（週2回、2年間）履修が義務付けられている。

を行う。聴解練習こそないが、この段階では、筆答練習した QA を口頭練習に応用してやり取りを行うこともある。例えば、複合過去形については、完了用法の「経験」や *pas encore* を使ったものは QA で、過去用法の「バカンスでしたこと」なども QA で行う。半過去形については「現在の状況と過去の状況の比較」や、複合過去形とともに「過去の時の出来事と状況を表す」テーマで複数の文章作成を行う。

c. 概念化の補助として英語との比較・日本語の等価表現を活用

既習言語の知識は外国語学習においては最初の概念化の補助となりえ、それによって文法説明に割く時間を節約することができる。例えば、形態的特徴に現れているように、複合過去形の根源的意味は「現在完了」であり「過去」は派生的に現れた意味である。大過去形は英語の過去完了に相当する。このように、大まかに学習者が文法要素の役割を理解をした上で、英語との比較を行いシステムの違いを明確にしていく²。関係代名詞の *qui, que, dont, où* についても英語の等価要素 (*who/which, whom/which, of whom/of which, where*) をあげて説明を簡略化した上で、フランス語では人とももの区別をしないことをつけ加える。日本語は英語からの類推あるいは概念的な説明だけで文法要素の機能を理解しにくい場合に、概念を理解する補助として使用する。例えば、出来事 vs 状況という二項対立式説明だけでは複合過去形と半過去形の対比を概念化しにくい状態動詞や *être* + 属詞について、*Elle était gentille* (彼女は親切だった) / *Elle a été gentille* (彼女は親切にしてくれた)、完了動詞についても *Il partait* (彼は出発しようとしていた) / *Il est parti* (彼は出発した) と日本語訳を添えることで発話状況を明確にすることができる。複合過去形の完了用法についても「完了」「経験」などの概念に「もう～した」「まだ～していない」「～したことがある」と日本語訳を添えることで具体的な発話状況をイメージさせることができる。もちろん実際に知識を定着させるには長い運用練習が必要なのだが、文法要素の基本的役割を既成知識とリンクさせて概念化することは、学習の最初の段階では大変役立つ。

d. 語彙的要素の文法機能を重視

意味論の影響から、コミュニケーティヴ・アプローチ以降の教材では時間表現・空間表現のような語彙的要素の文法機能を重視する傾向にある。筆者の担当する授業でも時間表現は動詞時制形とセットで学習する。ここでも記憶を促進する補助として英語の等価表現 (*dernier/last, prochain/next*) との比較を行う。

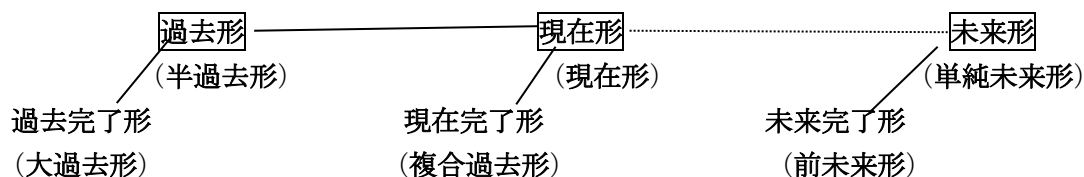
e. 一般的には扱わない項目 (動詞の構文、時間表現と前置詞の関係等) の重視

一般的に日本で文法学習といえば動詞時制形、名詞、代名詞、形容詞などの項目に限られる。しかし、担当する授業の後半では時事的な文章の読解を行うので、文章の内容を理解する上で大きな役割を果たす動詞+直接目的語+(前置詞 *à/de* を伴う) 間接不定詞の構文 (ex. *inviter qqn à + inf.*) や前置詞を含んだ時間表現 (ex. *pendant / depuis / dans/ en + 時間*) の学習は欠かせない。これらの要素についても、それぞれの意味を明示するだけでなく、穴埋めによる文章完成、書き換え、作文などの練習を行う。

f. システムの全体像を提示して文法要素の機能に対する理解を促進

² 例えば、行為の継続時間の起点が示される状態動詞の現在完了進行形は、フランス語では現在形で表す (ex. *J' habite à Osaka depuis 3 ans / I' ve been living in Osaka for 3 years.*) などである。

複合過去形、半過去形、単純未来形まで学習したら、単純過去形を除く直説法の動詞時制形の関係が視覚的に把握できるような図式を提示する。



直説法の現在形、半過去形、単純未来形が現在、過去、未来の基点になる時制形であり、複合過去形、大過去形、前未来形は助動詞の時制形が表すように、現在形、半過去形、単純未来形の完了形となる。この際、英語の未来完了、過去完了など英語の文法用語を併記すると時制形の関係が理解しやすくなるようである。このように時制形のことを大まかに理解した上で、他の時制形（大過去形、前未来形）をコンパクトに学ぶ。

4. 教材作成のコツ

筆者が担当する授業では市販の教科書を使用せずプリントを配付している。文法解説の大部分は自前であるが、練習問題は自前のもものと市販の教材の一部を組み合わせて、次のような教材を作成している。

・1年次の復習から文法問題に移行する一連の練習問題

- 『フランス語21』（曾我、中川他、白水社）の「一日の時間の使い方の聴解問題」を使用
 - －録音を使い内容を聞き取る（コピーは渡さない）
 - －内容確認してコピーを渡し、動詞の活用を入れて文章を完成させる
 - －音読
 - －2パターンの疑問文作成

・複合過去形の教材

Alphabetix の「Victor のタヒチ旅行」の文章作成問題使用

- －複合過去形の文法解説（活用表、PP の一覧表は Alphabetix を参照）
- －活用練習
- －文章完成（日本語訳を添えた動詞活用の穴埋め）
- －QA

－短い文章（旅行先からの葉書）読解/ Alphabetix の「Victor のタヒチ旅行」の文章作成問題

・単純未来と関係代名詞の教材

- 『Eメールのフランス語』（田中幸子、Isabelle Foltête、白水社）の「近況を尋ねる・報告する」のメール文複数を借用
 - －単純未来形と関係代名詞の文法解説
 - －単純未来形活用練習
 - －文章完成問題
 - －関係代名詞を使い2つの文を一つにする問題
 - －メール文読解

これらの例の他にも、動詞の構文については『フランス語構文練習帳 - 改訂版』（石野好一）、前置詞を含む時間表現と動詞時制形的相关性については *Grammaire Progressive - niveau intermédiaire* - を参照しながら、例文と練習問題を作成している。秋学期は *Journal des enfants*

の文化・社会に関する記事 (ex. フランス人旅行者殺害、パリのテロ、Resto du cœur) を活用して、テキストと内容に関する質問を添えた長文問題を作成している。長文読解問題については、内容が把握できているかを問う質問に日本語で答えることで文章の概要を理解しているか否かを確認し、重要構文を含む数か所のみ日本語に訳す問題になっている。

5. 授業運営

文法読解中心の授業の問題点としては授業の進め方が単調になるという点あげられるだろう。文法解説から練習問題に移行する基本的パターンは変えられないが、できる限り学習者間の話し合いを行うことができ、クラス全体で授業内容を理解できるよう、状況・段階に応じて柔軟に進め方を変化させている。

春学期は新出の基本文法事項は教員が解説し、授業中に基本的な練習を行い、残りを宿題にするというスタンダードな進め方で授業を行う。宿題の答え合わせについては、基本的な練習問題はペア、グループで答えを確認したのち、全員で答えを音読する、教師の質問に口頭で答えを返すという手順をとる。答えの綴りは確認する必要がある場合は教師が正解を板書する。疑問点については自由に質問あるいはペア・グループ内でディスカッションを行う。

秋学期は読解中心の練習問題になるので、授業が単調にならないよう反転授業を取り入れる。文法解説、練習問題、読解テキストは大学のネット上に 4~5 日前までにアップし、次回授業までにやっておく課題を指示する。授業開始時に文法事項が理解できたか確認の時間を取り、質問を受け付ける。課題に出した練習問題の答え合わせは、各自が好きな問題を選択して答えを板書する。教員は間違っている部分に下線を引くが、なぜ間違いなのかは最初から解説しない。答えを書いた学習者は必要に応じて他の学習者と話し合い正解を導き出す。すべて正解がそろったところで教師は解説を加える。一方的な教師からの解説は最小限にし、できる限り学生からの質問に答えるようにする。

その他、時間の余裕があれば文化情報を加えることもある。例えば、条件法、指示代名詞の練習問題例はシャンソンの歌詞や映画のシナリオから借用したものが含まれており (ex. *Mais la vie sépare ceux qui s'aime* [*Les feuilles mortes* より] / *J'aurais voulu être un artiste* [*Star mania* より])、文法解説を加える際に映像や音楽を取り入れて曲の背景などを解説する。

6. 総括と今後の課題

学習者がこの授業で学んだ文法事項のレベルは実用フランス語検定の 3 級程度である。週 1 回の授業なので口頭で自由に運用できるほど学習要素が定着していないが、辞書を活用すれば教材に使用した *Journal des enfants* の記事はほぼ正確に読解することができる。英語のスキルが基盤としてあるからか、物語の続きや夏休みにしたことを書いても、細部の間違いはあるものの、筋の通ったかなり詳しい文章にすることができる。

このような授業の試みを始めて本年度で 3 年目になる。まだ試行錯誤の段階を抜けておらず、教材作成、授業運営ともに、受講する学生の要望を取り入れながら毎年変更・改良を重ねている状況である。文章が音読練習をするための音声教材や授業外で読める多読用の教材など、補充しなければならないものも少なくない。それでも授業アンケートを見ると、少人数で学習者の理解度を確認しながら授業が進むこと、英語と比較しながら文法を説明したこと、重要ポイントを端的にまとめた教材があったことなどが評価できるポイントとしてあがっており、概ね学習者には授業内容が好意的に受けとめられているようである。